

インターナショナル新書

『危険な「美学」』

津上英輔 (美学者・成城大学文芸学部教授)

定価: 本体 820 円 + 税

体裁: 新書判 / 200 ページ

発行: 集英社インターナショナル (発売: 集英社)

ISBN978-4-7976-8044-7



高橋源一郎氏推薦!

「美の危険さに

気づかぬ時代は恐ろしい。」

10月7日(金)発売!

「美」を感じる感性そのものに潜む危険

芸術が政治に利用されるという話は数多くありますが、本書は三大価値である真・善・美の「美」そのものに実は危険が潜んでいるということを著者独自の理論で指摘した、画期的な一冊です。高村光太郎の戦意高揚の詩やジブリアニメの「風立ちぬ」で描かれた「美しい飛行機作り」という行為に潜む危険。トーマス・マンの『魔の山』における結核患者の描写や、特攻隊の「散華」を例に、イメージを負から正へ転換させてしまう感性の驚くべき反転作用について解説します。「美」を感じるとはどういうことなのか? 誰もが有する「感性」に潜む危険を解き明かします。



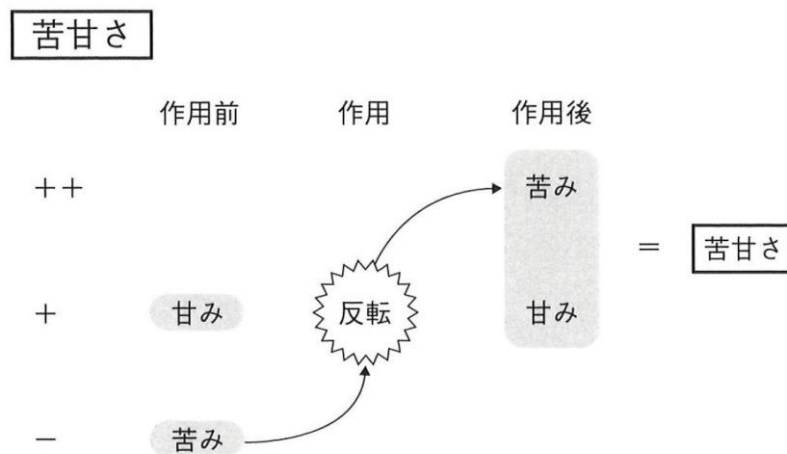
【津上英輔】 美学者。成城大学文芸学部教授。一九五五年、東京生まれ。東京大学文学部卒業、同大学院修了。博士(文学)。フライブルク大学で音楽学を専攻。同志社女子大学専任講師、成城大学助教授を歴任。その間、イエイル大学客員研究員、ストックホルム大学客員教授。著書に『あじわいの構造』(春秋社)、『メイイのアリストテレス』『詩学』解釈とオペラの誕生』(勁草書房)、共訳書に D.J.グラウト、C.V.パリスカ『新西洋音楽史』(音楽之友社) などがある。

著者オリジナルの理論「感性の統合反転作用」とは？

苦い+甘い=苦甘さ

味覚における苦甘さとは、甘みと苦みから生じる。しかし甘みと苦みがあれば、常に苦甘さが生じるとは限らない。苦いイチゴは傷んでいるのではないかと疑われるし、逆に変に甘いゴーヤーも、いただけない。このとき、甘みと苦みは別個独立の二つの味に留まっている。ところが、ビターチョコレートのように、甘みと苦みがあるしかたで結合するとき、それは苦甘さとして、単なる甘みに一つの性格ないし陰影の加わった、深みのある甘みとして、一つの味になる。

(本文より)



感性の反転作用は必ず負から正の値に向かう？

精神異常を表す英単語と日本語の形容動詞との歴史的意味の変遷を網羅的に検討した私の調査結果によれば、感性の反転作用は、正から負でも、負からゼロでもなく、必ず負から正の値に向かう陽性の反転である。たとえば、もともと精神錯乱に関連して負の価値を有していた crazy(クレイジー)は、芸術批評のような感性的な文脈では「熱狂的な、素晴らしい」という正の意味に転じ、日本語で、甲に次ぐ第二の劣ったものである「乙」が「乙な」と形容動詞化して、対象のありさまを感性的に評価する用法では、「しゃれて気がきいていること」(『広辞苑』)を意味するようになる。このことから、感性の行う反転作用は、統合とともに生じる場合であれ、それなしに生じる場合であれ、必ず陽性であると結論しよう。(本文より)

※ぜひ貴媒体にてご紹介をご検討いただけますと幸いです。

【本書のお問い合わせ先】

集英社インターナショナル

電話 03-5211-2630 公式サイト <https://www.shueisha-int.co.jp/>